南京新唱

南京新唱

秋草道人著

南京新唱

南京新唱

秋草道人

秋草道人著

南京新唱

東京
春陽堂

序

『温其如玉』とは人格を比喩した古語だが、私はそれを移して此小歌集の總評とする。

玉の如しといつても、これは切磋琢磨して人工で圓くしたそれではない。天產のまゝ、撈取した姿そのままで温、潤、澤、圓を具へてゐる璞なのである。シヨウ・ウインドウで輝を競ひ價を待つそれではなく、むしろ光

を石に韞んで、山でなら木を潤はせ、溪でなら流れを芳ばしくしようといふたぐひのそれである。

此集の歌を口ずさんでゐると、心が大むかしの奈良や飛鳥へさへも夢遊しさうになる。

が、それは作者が強ひて力めて舌足らずのやうな古風な物いひをしたり別仕立の古雅な服を着て、ずぢりもぢり氣取つて歩いたりするからではない。いや、その不斷着の古ズボンが、其かぶり馴らしの古帽子が期せずして上代樣の褌(はかま)とも頭巾(ときん)とも見えるからである。其口を衝いて出る常の言葉が、趣味の一致によつて、自

然と萬葉句調になるからである。此努力を連想せしめない素直な、おのづからな萬葉調がまた頗る有りがたく懷かしい。

秋草堂主人會津八一君は昔は私の弟子で、私が英文學などを教へたこともあつたが、今は私の心友であり、師匠である。

君は天成の、しかも早熟の文學者であり、藝術家であつたらしい。夙に俳句には大抱負があつて、青年時代にすら、既に郷黨の間には立派な名を成してゐたといふ。

けれども歌人としては、最近二三年間に既に四五百首のよみすてがあるにも拘らず、歌集一册が全くの君の初舞臺である。

或は同人中にも君の歌人であることをまだ知らぬ者があるだらう。いや、君を斯う急に歌人たらしめたのは或は私であるかも知れない。といふのは、私は、君がまだあまり歌などをよまうともしてゐなかつた頃に仔細あつて君の歌人たるべきことを看破し、は大げふだが、立派によめる人だ位に思つて、斯道の師としての敬意を表した。それは私が六十一になつた時でも

う五年以前になる。此關係からいふと、私は君の目附親なのだ。歌學の門外漢である私が此集に序を書くのは、主としてさういふ因緣があるからである。

とにかく君は天成の藝術家である。學は和漢洋を兼ねて、あらゆる文雅の鑑識に秀で、其趣味性の及ぶ所古今、内外、雅俗に渉つて廣く深く、最も印刻の事にくはしい。近ごろは馬にも乘る、自得流の畫もかく、書の如きは優に一家を成さうとしてゐる。就中石佛の研究にかけては、多分現下の第一二人者といつてよい造詣があるだらう。磊落で洒脫で、それでゐて存外細心な

思ひやりもあつて、手も達者なら脚も達者で、筆も口も達者だ。一たび興に乘じたりといふと談論風發して、眼中古人なく、今人なく、其氣燄當るべからざるものがある。けれども、ほゞ豫想されるであらう如く逸居高臥癖の持主だから、世渡りには極無精で婆娑ッ氣が無さ過ぎて折角の蘊蓄を黴臭くなるまで仕舞ひ込んでおくのが困つた持病である。

此歌集の公刊は、君としては、全く不思議な氣まぐれである。若しもこれがきつかけになつて、君の持病が治るやうなら――これが橋渡しになつて、君と社會と

が連絡されるやうになるなら――それは、君のためにも、社會のためにも、頗る賀すべきことだと思ふ。私がやゝくどい序文を書いたのは、一にそれを希ふがためである。目附親だといふ自慢ごゝろから、身贔屓の推讃を敢てするのではない。

大正十三年八月下旬

逍遙

題詩

飄然訪古過寧樂。蕭寺淒涼響粥魚。
拂拭塵煤攀寶閣。摩挲金碧到緇廬。
句成林下鹿鳴處。感動山中花落餘。
懷托永晉幽味足。君心枯淡野僧如。

武石貞松 拜

序

友あり、秋草道人といふ。われ彼と交ること多年、淡きもの愈淡きを加へて、しかも憎惡の念しきりにいたる。何によりてしかく彼を憎む。瞑目多時、事由三を得たり。

彼質不羈にして氣隨氣儘を以て性を養ふ。故に意一度動けば、百の用務も擲つて、飄然去つて遠きに遊ぶ。

興盡き財盡く、すなはち歸つて肱を曲げて睡る。境涯眞に羨むべし。かゝる身のほどは駑馬われの如きも、つねに念じて、なほたえて果さゞるもの、彼遙にわれに先じて、大に駿足を誇る。これ憎まざる可らざる理の一つ。

彼客を好みて議論風發四筵を驚かす。されど多くは衷心の聲にあらずして消閑一時の戲なるに似たり。彼が相對して眞情を吐露せんと欲するは、たゞ奈良の古き佛だちか。彼慈顔を仰ぎて大に語るあらんとす。諸佛何の意か顧るところなし。彼悄然としてうたふ

らく、『ちかづきてあふぎみれども、みほとけのみそなはすともあらぬさびしさ』と。われ聞いて、ひそかに掌を拍つてよろこぶ。されど、一度われと語る時、彼何の心を以てわれに對するかをおもへば、意平ならざるものあつて存す。これ憎まざる可らざる理のふたつ。

彼自ら散木を以て任じ、暇日の多きを樂んで悠々筆硯の間に遊ぶ。俗才、世路に彷徨するわれの如き、羨望ために死せんとす。しかも、その書を展し、その詠を誦するや、吾たゞ妙と稱して羨むことなし。蒼天資おのづから異るあるを知ればなり。

彼がみづからを信ずるやあつし。いはく、われ古人を見ざるをかなしまずして、古人のわれを見ざるを古人のためにかなしむと。われもと、訓詁註疏に專なるもの、つねに古人をこれ貴しとなす。彼平然としてあが佛をなみす。われ古人のために彼を憎む。

われまた藝術の士のこの氣魄なかるべからざるを知る。故に必しも憎むこと深からず。されども、彼が、世の歌の奇なるもの、巧なるものを排しながら、世の奇工のすべてを詠中に藏するを憎む。俳家纎細の工夫を藉り來りて、しかも蔽ふに萬葉素樸の風格を以てす

るを憎む。作者知つて然るか、知らずして然るか。未だ知らず。われはたゞ、その歌とその言の相背くあるを知る。

大極殿址は南京舊蹟の雄。行人誰か感慨無量ならざるを得ん。われ往日ゆきとぶらうて、空しく涙して歸れり。道人の如き、まさに吟詠百首わが無能を償はざるべからず。何ぞ知らん、彼よみすてゝいふ、『はたなかの、かれたるしばにたつひとの、うごくともなし、ものもふらしも』と。つひにみづからに觸るゝなくしてやむ。何等の老猾ぞ。これを憎まずして、世にまた憎

むべき何ありや。
道人今斯の如き歌九十三首をあつめて一集をなし、われに序を徴す。道人すでにわが不文を知つて揶揄一番するか。以て大に憎むべし。
われ彼の憎むべき事由を數へ來るやつひに三ならず。五六また七、いよ〻出で〻徒に彼を大にし、われを小にす。われいかでか堪へん。如かず筆を擱かんには。

大正十三年八月念三日

不言齋主人　山口剛

自序

もし歌は約束をもて詠むべしとならば、われ歌を詠むべからず。もし流行に順ひて詠むべしとならば、われまた歌を詠むべからず。
吾は世に歌あることを知らず、世の人また吾に歌あるを知らず、吾またわが歌の果してよき歌なりや否やを知らず。

たま〱今の世に巧なりと稱せらるゝ人の歌を見ることあるも、巧なるがために吾これを好まず。奇なるを以て稱せらるゝものを見るも、奇なるがために吾これを好まず。新しといはるゝもの、強しといはるゝもの吾またこれを好まず。吾が眞に好める歌とては、己が歌あるのみ。

採訪散策の時、いつとなく思ひ泛びしを、いく度もくりかへし口ずさみて、おのづから詠み据えたるもの、これ吾が歌なり。さればにや、一人にて遠き路を歩きながら、聲低くこれを唱ふるとき、わが歌のことに吾に妙

味あるを覺ゆ。

われ奈良の風光と美術とを酷愛して、其間に徘徊することすでにいく度ぞ。遂に或は骨をこゝに埋めんとさへおもへり。こゝにして詠じたる歌は、吾ながら心ゆくばかりなり。われ今これを誦すれば、青山たちまち遠く繞り、綠樹甍に迫りて、恍惚として、身はすでに舊都の中に在るが如し。しかもまた、伽藍寂寞、朱柱たま〱傾き、堊壁ときに破れ、寒鼠は梁上に鳴き、香煙は床上に絕ゆるの狀を想起して、愴然これを久うす。おもふに、かくの如き佛國の荒廢は諸經もいまだ說か

ざりしところ、この荒廢あるによりて、わが神魂の遠く此間に奪ひ去らるゝか。

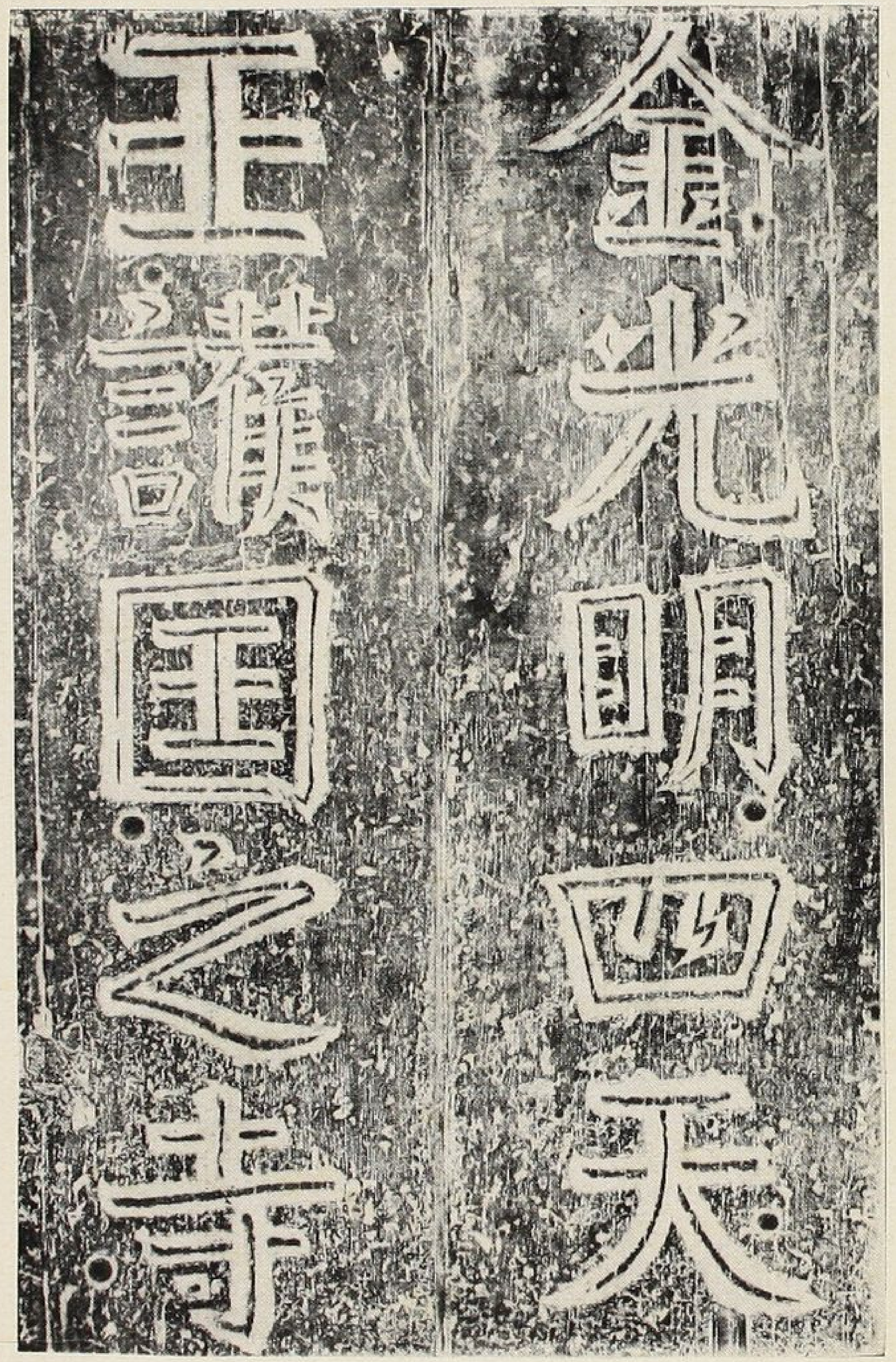
西國三十三番の靈場を巡拜する善男善女は、ゆくゆく御詠歌を高唱して羈旅の辛勞を忘れむとす。各々其笠に書して同行二人といふ。蓋し行住つねに大慈大悲の加護を信ずるなり。しかるに吾が世に於けるや、實に乾坤に孤笻なり、獨往して獨唱し、昂々として顧返することなし。しかも歩々今やうやく蹉跎、まことに廢墟の荒草を踐むが如し。あゝ、行路かくの如くにして、吾が南京の歌の、ます〱吾に妙味あるか。

わが鄕さきに沙門良寛を出せり、菴を國上山下に結び、風狂にして世を終ふ。われ其遺作を欽賞することこゝに二十餘年、この頃やうやく都門に其名を知る者あるを見る。その示寂以後實に九十四年なり。良寛常にいへらく、平生書家の書と歌人の歌とを好まずと。われ亦た少しく翰墨に遊び、塗鴉いさゝか自ら怡ぶ。遂に一の能くするなしといへども、また法家の餘臭を帶びざるを信ず。たゞ平素詳に歌壇の消息を知らず、徒に當世作家の新奇と匠習とを排すといへども、良寛をしてわが歌を地下に聞かしめば、しらず、果して何の

許を下すべきかを。又しらず、今より百年の後、北國更に一風狂子を出し、其人垢衣にして被髪し、野處して放歌し、吾等をして地下に耳を欹てしむべきものありや否やを。

大正十三年九月東京下落合の秋草堂にて

會津八一



東大寺西門十字勅額

凡例

一、『南京新唱』九十三首は明治四十一年八月以後の作なり。

一、歌の排列は作の前後によらず、これを詠みたる所にしたがひてわかち載せたり。

一、數遊して一首も無きところあり、一遊してたちまち數首を成せるところありあり、遊ぶこと屢〻なるがた

めに詠ずること亦た自ら多きを致せるあり、單作あり、聯作あり、其間の心境また一様にあらず。是を以て、同項の歌にして全く別人の作を以て見るべきもの無きにあらず。今みなこれを讀者の鑑別にまかせて詳に註せず。

一、浄瑠璃寺は山城に屬し、磯長陵、觀心寺は河内に在り、南大和の諸刹の如き亦た南京を距る稍遠きも、今はみな併せ載せたり。

一、武蔵野といはずして春日野といひ、夢殿の本尊を觀音となし、新藥師寺金堂の十二神將中本尊の右側

に立てるものを迷企羅大將となし、三輪石佛を藥師となすの類は、みな近俗の耳に慣れたるところにしたがひたるのみ。又光明皇后を「藤原のおほききさき」といひ、唐招提寺を「おほてら」といふの類は、敢て前例ありといふにあらず。世上の博識家しばらくこれを諒せよ。

一、卷末『山中高歌』十首、『放浪唫草』三十二首、『村莊雜事』十五首を附載す。第一は大正九年五月信濃の北境に浴泉して作れるもの、第二は同年十月より翌年二月にわたりて、中國九州の歴遊中に獲たるもの、

第三は落合村莊平常の漫吟なり。情趣一にあらず、映發して興を助けむことを期せり。

一、表紙の圖案は漢代の古瓦に採れり。此圖樣は黄中慧が「琴歸室瓦當文鈔」にも載せたれども、今は呉大徵が精拓本に據りて景印せり。

一、挿入の拓本は皆な珍藏して秋草堂中にあるもの、揭げて懷古の資となさんとす。就中東大寺西門の額は、聖武天皇の宸翰と稱し、每字一尺、氣格雄大を極む。銅製の大燈籠は大佛殿前に立てり、高さ一丈三尺、燈扉の高さ四尺〇三分、扉すべて六面あり、こゝに

揭げたるは其最も完好に保存せられたるものなり。著名なる大佛は屢〻災に罹り、頭手ともに後世の修補にして、天平の古制はかへりて其臺座の蓮瓣に徵すべきのみ。瓣の高さ一丈、こゝに載せたるものは其一小部分約二尺四方を覆ふに過ぎず。三月堂柱面の刻文は、千日供花の行人等の手に成りしものにて、藤原末期に於ける宗教生活の一端を想見せしむるに足る。其文に曰く

始自長承元年十一月廿八日千日不斷花也

保延元年八月廿三日千日滿但結願九月十二日畢

久安五年四月十四日自千日花奉始舉也
仁平元年十二月卅…
仁治……
平治元年七月十三日千日花奉始……

鳳凰磚は今南法華寺これを收藏すれども岡寺に傳へて古の岡本宮の腰瓦と稱するものと、同系統たること明かなり。方一尺三寸二分、厚さ二寸。

二、師友の或は序跋を賜ひ或は詩畫を寄せられたるもの多し、光彩この小册子に溢る、何の辭かよく謝せん。たゞ多くは過褒にして當らず。退いてひそかに自ら愧づ。

一、排印のこと多く岡康雄君をわづらはせたり、特に之を記す。

目次

序　坪内逍遙

題詩　武石貞松

序　山口剛

自序

凡例

南京新唱　九十三首　三七頁

春日野

興福寺をおもふ

猿澤池

博物館にて

高畑

新藥師寺金堂

香藥師

高圓山を望みて

瀧阪

東大寺大佛

戒壇院を出でゝ

東大寺懷古

奈良阪

淨瑠璃寺

大極芝

海龍王寺

法華寺

秋篠寺

西大寺四王堂

喜光寺

唐招提寺

唐僧鑑眞の像に

藥師寺

法隆寺村に宿りて

聖德太子遠忌

法隆寺金堂

五重塔

夢殿觀音に

病中法隆寺を過ぎて

中宮寺

法輪寺
當麻寺
役小角の木像
磯長陵にて太子を懐ふ
觀心寺
橘寺
弘福寺
三輪彌勒谷石佛
室生寺
汽車中

奈良の宿にて
奈良より吉武生へ
奈良にて大泉生へ
東京にかへりて
山中高歌　十首　八五頁
放浪唫草　三十二首　九三頁
船中
鞆の津
尾の道

嚴島
別府にて
別府にて夢想
耶馬溪にて
中津自性寺にて大雅を憶ふ
木の葉村にて
肥後の海邊にて
村莊雜事　十七首　一二五頁
印象　吉江喬松

讀後感　櫻井天壇
我觀　横山有策
題詞　増村度次

挿入寫眞版

表紙　鹿の瓦
東大寺西門十字勅額
織田一磨氏「祇家町」
東大寺三月堂柱面刻文
東大寺大銅燈扉文様

富本憲吉氏「大和の百姓家」
東大寺大佛蓮瓣文様
南法華寺鳳凰磚
鶴田吾郎氏「高畑」
淡島寒月氏「木の葉猿」

南京新唱

春日野

かすが野に押してるつきのほがらかに
あきのゆふべとなりにけるかも

かすがのゝみくさ折りしきふすしかの
つのさへさやにてるつくよかも

うちふしてものもふ草のまくらべを
あしたのしかのむれわたりつゝ

つの刈るとしか追ふ人はおほてらの
むねふきやぶるかぜにかもにる

こがくれてあらそふらしきさをしかの
つのゝひゞきに夜はくだちつゝ

うらみわびたちあかしたるさをしかの
もゆるまなこにあきのかぜふく

かすが野にふれるしらゆきあすのごと
けぬべくわれはいにしへおもほゆ

もりかげのふぢのふる根によるしかの
ねむりしつけきはるの雪かな

興福寺をおもふ

はるきぬといまかもろびとゆきかへり
ほとけのにはに花さくらしも

猿澤池

わぎもこがきぬかけやなぎみまくほり
いけをめぐりぬかさゝしながら

博物館にて

くわんおんの背にそふ蘆のひともとの
あさきみどりにはるたつらしも

ほゝゑみてうつゝごゝろにありたゝす
百濟ぼとけにしくものぞなき

社家町　　　藤田一磨氏

つといればあしたのかべにたちならぶ
かの招提のだいぼさつたち
はつなつのかぜとなりぬとみほとけは
をゆびのうれにほのしらすらし

こんでいのほとけうすれし紺綾の
だいまんだらに虹のはねうつ

高　畑

たび人の目にいたきまでみどりなる
築地のひまの菜畑のいろ

香薬師わがをろがむとのきひくき
ひるのちまたをなづみゆくかも

新薬師寺金堂

たび人にひらく御堂のしとみより
迷企羅が太刀にあさひさしたり

香薬師

みほとけのうつらまなこにいにしへの
やまとくにはらかすみてあるらし

ちかづきて仰ぎみれどもみほとけの
みそなはすともあらぬさびしさ

高圓山をのぞみて

あきはぎは袖にはすらじふるさとに
ゆきてしめさむ妹もあらなくに

瀧　阪

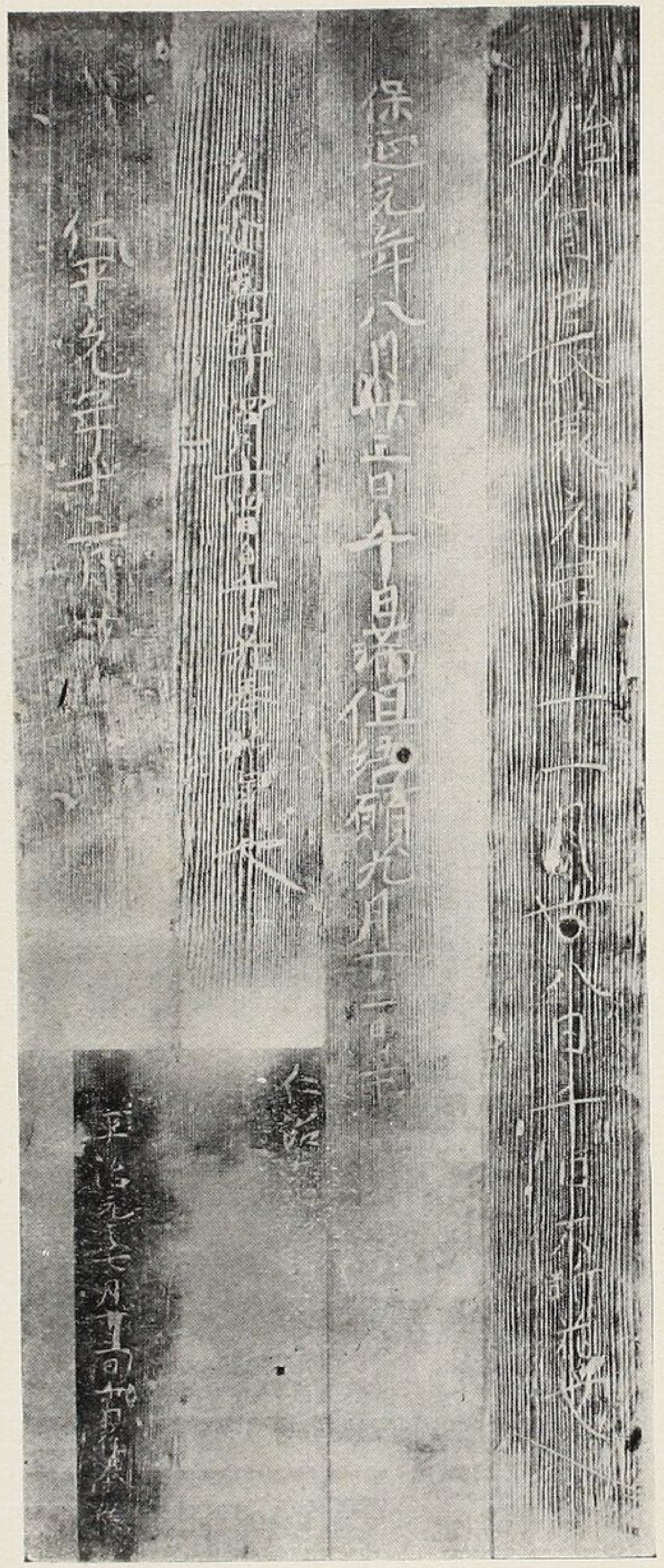
かきの實をになひてくだるむらびとに
いくたびあひしたきさかのみち

まめがきをあまたもとめてひとつづゝ
くひもてゆきしたきさかのみち

缺けおちていはのしたなるくさむらの
つちとなりけむほとけかなしも

たきさかのきしのもみぢにきぬかけて
きよきかはせにあそぶ子等はも

ゆふされぱきしのはにふによる蟹の
あかきはさみに秋のかぜふく



東大寺三月堂柱面刻文

東大寺

おほらかにもろ手のゆびをひらかせて
おほきほとけはあまたらしたり

あまたゝびこのひろまへにめぐりきて
たちたるわれぞ知るやみほとけ

東大寺大銅燈扉文樣

戒壇院をいでゝ

毘樓博叉まゆねよせたるまなざしを
まなこにみつゝあきの野をゆく

東大寺懷古

おほてらのほとけのかぎり灯ともして
よるのみゆきを待つぞゆゝしき

おほてらのにはの幡鉾さよふけて
ぬひのほとけに露ぞおきにける

奈良阪

ならさかのいしのほとけのおとがひに
こさめながるゝはるはきにけり

浄瑠璃寺

浄るりの名をなつかしみみゆきふる
はるのやまべをひとりゆくなり

かれわたる池のおもてのあしのまに
かげうちひたしくるゝ塔かな

毘沙門のふりしころものすそのうらに
くれなゐもゆる寶相華かな

大極芝

はたなかのかれたるしばに立つひとの
うごくともなしものもふらしも

はたなかに眞日てりたらすひとむらの
かれたるくさにたちなげくかな

海龍王寺

しぐれのあめいたくなふりそ金堂の
はしらのまそほ壁にながれむ

ふるてらのはしらにのこるたび人の
名をよみゆけどしるひともなし

法華寺懐古

ふぢはらのおほききさきをうつしみに
あひみるごとくあかきくちびる

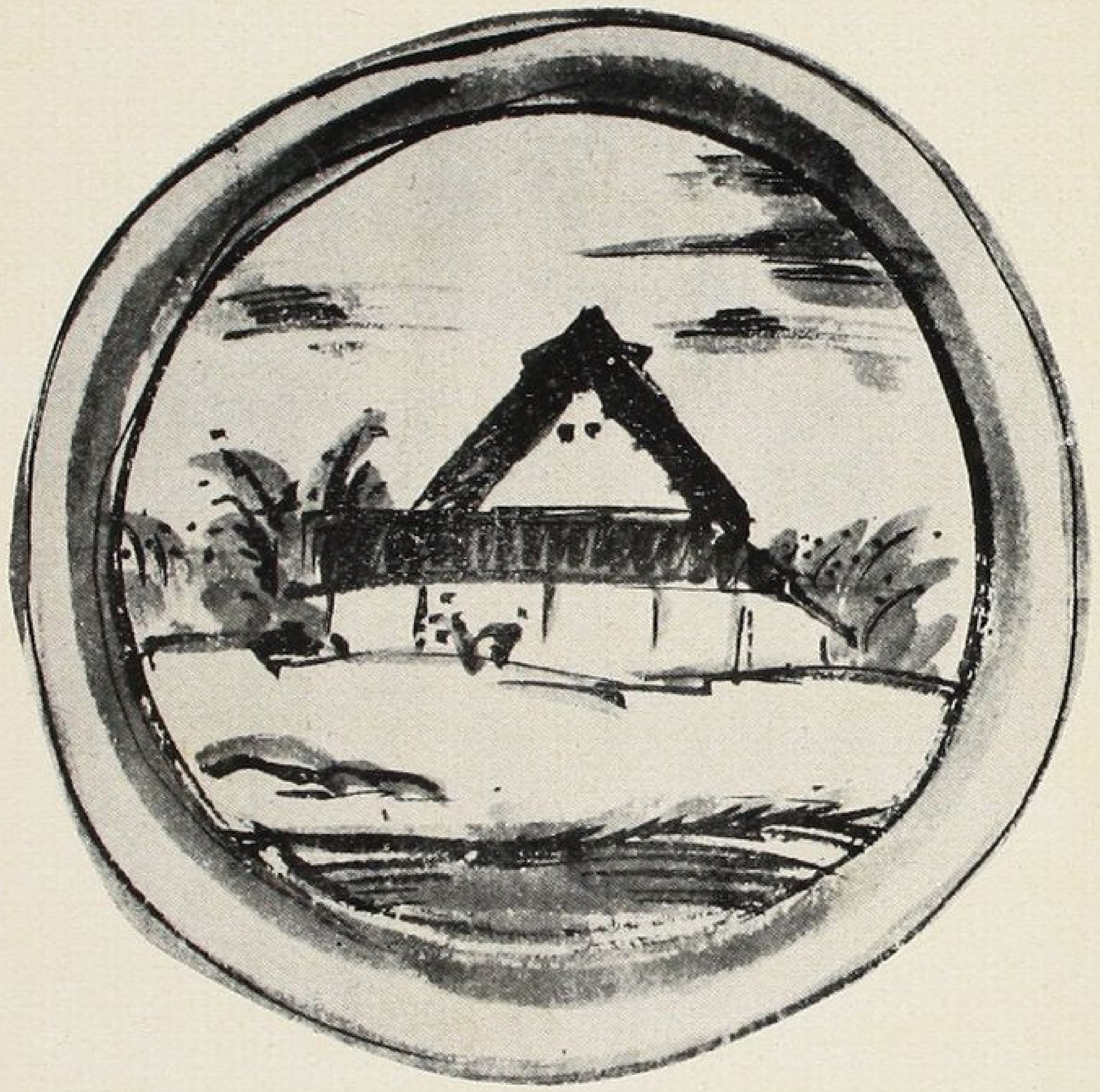
からふろの湯げたちまよふゆかのうへに
うみにあきたるあかきくちびる

からふろのゆげのおぼろにしゝむらを
ひとにすはせしほとけあやしも

秋篠寺

たかむらにさしいるゝ日もうらさびし
ほとけいまさぬあきしぬのさと

まばらなる竹のかなたのしろかべに
しだれてあかきかきの實のかず



大和の百姓家　　富本憲吉氏

あきしぬのみてらをいでゝかへりみる
いこまがたけにひはおちむとす

西大寺四王堂

まがつみはいまのうつゝにありこせど
踐みしほとけのゆくへしらずも

喜光寺

ひとりきてかなしむ寺のしろかべに
汽車のひゞきのゆきかへりつゝ

唐招提寺

おほてらのまろきはしらの月かげを
つちにふみつゝものをこそおもへ

せんだんのほとけほのてるともし火の
ゆらゝゆらゝにまつのかぜふく

唐僧鑑眞の像に

とこしへにねむりておはせおほてらの
いまのすがたにうちなかむよは

薬師寺

しぐれふる野すゑのむらのこのまより
みいでゝうれし薬師寺の塔

くさにねてあふげばのきのあをそらに
雀かつとぶやくし寺の塔

東大寺大佛蓮瓣文様

水煙のあまつをとめがころもでの
ひまにもすめる秋のそらかな

あらしふくふるきみやこのなかぞらの
いりひの雲にもゆる塔かな

法隆寺村にやどりて

いかるがのさとのおとめはよもすがら
きぬはたおれりあきちかみかも

聖徳太子遠忌

うまやどのみこのまつりもちかづきぬ
松みどりなるいかるがのさと

いかるがのさとびとこぞりいにしへに
よみがへるべきはるはきむかふ

うまやどのみこのみことはいつのよの
いかなるひとかあふがざらめや

みとらしのあづさのまゆみつるはけて
ひきてかへらぬいにしへあはれ

法隆寺金堂

おしひらくおもきとびらのあひだより
はやみえたまふみほとけのかほ

たちいでゝとゞろとざす金堂の
とびらのおとにくるゝけふかな

五重塔

ちとせあまりみたび周れるもゝとせを
ひとひのごとくたてるこの塔

夢殿観音に

あめつちにわれひとりゐてたつごとき
このさびしさをきみはほゝゑむ

病中法隆寺を過ぎて

あまたみしてらにはあれどあきの日に
もゆるいらかはけふみつるかも

うつしよのかたみにせむといたつきの
みをうながしてみにこしわれは

ひとりきてめぐる御堂のかべのゑの
ほとけのくにもあれにけるかも

おほてらのかべのふるゑにうすれたる
ほとけのまなこわれをみまもる

うすれゆくかべゑのほとけもろともに
わがたまのをのたえぬともよし

ほろびゆくちとせののちにこのてらの
いづれのほとけありたゝすらむ

中宮寺

みほとけのあごとひぢとにあまでらの
あさのひかりのともしきろかも

南法華寺鳳凰甎

法輪寺

くわんおんのしろきひたひに瓔珞の
かげうごかしてかぜわたるみゆ

みとらしのはちすにのこるあせいろの
みどりなふきそこがらしのかぜ

二上山

あまつかぜ吹きのすさみにふたがみの
をさへみねさへかつらぎのくも

當麻寺

ふたがみのてらのきざはし秋たけて
やまのしづくにぬれぬ日ぞなき

ふたがみのすその竹むらひるがへし
かぜふきいでぬ塔のひさしに

役小角の木像

おにひとつ行者のひざをぬけいでゝ
あられうつらむふたがみの里

あしびきの山のはざまのいはかどの
つらゝに似たるきみがあごひげ

磯長陵にて太子をおもふ

やまとより吹きくるかぜをよもすがら
山のこぬれにきゝあかしつゝ

觀心寺

さきだちて僧がさゝぐるともし火に
くしきほとけのまゆあらはなり

なまめきてひざにたてたるしろたへの
ほとけのひぢはうつゝともなし

橘寺

くろ駒のあさのあがきにふませたる
をかのくさねとなづみぞわがこし

弘福寺

世をそしるまづしき僧のまもり來し
このくさむらのしろきいしずゑ

三輪彌勒谷石佛

耳しふとぬかづくひとも三輪やまの
このあきかぜをきかざらめやも

室生寺

さゝやかに丹ぬりの塔のたちすます
木のまにあそぶ山さとの子等

みほとけの肱まろらなるやははだの
あせむすまでにしげる山かな

汽車中

やまとぢの瑠璃のみそらにたつくもは
いづれのてらのうへにかもあらむ

わさだかるおとめがとものかゝふりの
白きをみつゝみち奈良にいる

奈良の宿にて

をしかなくふるきみやこのさむき夜を
いへはおもはずいにしへおもふに

高畑　　鶴田吾郎氏

なら山のしたはのくぬぎいろにいでゝ
ふるへのさとをおもひぞわがする

奈良より吉武生へ

あかき日のかたむくのらのいやはての
ならのみてらのかべのゑをおもへ

奈良にて大泉生に

のこりなくてらゆきめぐれかぜふきて
ふるきみやこはさむくありとも

ならさかを淨瑠璃でらにこゑむ日は
みちの眞埴にあしあやまちそ

東京にかへりて

ならやまをさかりし日よりあさにけに
みてらみほけおもかげに立つ

山中高歌

山田湯泉は長野縣豐野驛の東四里の谿間にあり。山色淨潔、嶺上の流霞も以て餐ふべきをおもはしむ。かつて憂患を抱いて此所に來り、遊ぶを五六日、爾來谿聲の尙ほ耳にあるを覺ゆ。

みすゞかるしなのゝはてのむらやまの
みねふきわたるみなつきのかぜ

かぎりなきみそらのはてをゆく雲の
いかにかなしきこゝろなるらむ

おしなべてさぎりこめたるおほぞらに
なほたちのぼるあかつきのくも

あさあけのをのへをいでし白くもの
いづれのそらにゆきかくれけむ

くもひとつみねをめぐりて湯のむらの
はるゝひまなきわがこゝかな

いにしへのヘラスのくにのおほ神を
あふぐがごときくものまはしら

あをそらのひるのうつゝにあらはれて
われに答へよいにしへのかみ

かぜのむたそらにみだるゝしらくもを
そこにふみつゝあさ川わたる

たにがはのそこのさゞれにわが馬の
ひづめもあをくさすひかげかな

かみつけのしら根のたにゝきえのこる
ゆきふみわけてつみしたかむな

放浪險草

船中

やそしまのそらおしわけてのぼる日に
たゞれてあかしあめのたなぐも

鞆の津

ふねはつるあさのうらわにうちむれて
しろきあひるのなくぞかなしき

尾の道

ほはしらのなかよりみゆるいそやまの
てらのもみぢばうつろひにけり

わがすてしバナナのかはをながしゆく
しほのうねりをしばしながむる

嚴　島

みやじまとひとのゆびさすともし火を
ひだりにみつゝふねはすぎゆく

再び嚴島を過ぎて

うなばらをわがこえくればあけぬりの
しまのやしろにふれるしらゆき

別府にて

いかしゆのあふるゝなかにもろあしを
ゆたけくのべてものおもひもなし

はまの湯のにはのこのまにいさりびの
かずもしられずみゆるこのごろ

ひさかたのあめにぬれつゝうなばらを
こぎたむあまがたぢからもがも

たちばなのこぬれたわゝにふくかぜの
やむときもなくいにしへおもほゆ

わがこゝろつくしのはまのたちばなの
いろつくまでにあきふけにけり

うなばらにむかふすやへのしらくもを
みやこのかたにゆめはぬひゆく

別府にて夢中の作

をちこちの島のやしろのもろがみに
わがうたよせよ沖つしらなみ

耶馬溪にて

大正十年十二月十二日、雨を冒して耶馬溪に入り、遊ぶこと二日にして去れり。時に歳やうやく晩く、霜葉すでに飛び盡して、枯梢と寒巖と孤客の病身に對するあるのみ。蕭條寥廓まことに比すべきものなかりしを記憶す。

あしびきのやまくに川のかはぎりに
しぬゝにぬれてわがひとりねし

やまくにのかはのくまわにたつきりの
われにこふれかゆめにみえつる

よひにきてあしたながむるむかつをの
こぬれしづかにしぐれふるなり

ひとみなのよしとふもみぢちりはてゝ
しぐるゝ山をひとりみるかな

しぐれふる山をしみればこゝろさへ
ぬれとほるべくおもほゆるかも

あさましくおいゆくやまのいはかどを
つゝみもあえずこのはちるなり

むかつをの杉のほこふでぬきもちて
ちひろのいはにうたかゝましを

しぐれふるやまくにかはのたにまより
ゆふかたまけてひとりいでゆく

やまくにの川のせさらずたつきりの
たちかへりつゝみむよしもがも

あきさらばやまくにかはのもみぢばの
いろにかいでむわれまちがてに

自性寺にて大雅をおもふ

自性寺は中津町にあり。池大雅かつて久しく留遊したりと稱し、寺中の二室の襖には彼が書畫二十餘種を貼りつめたり。われ此寺を訪ふこと前後二回、今は住職も住みつかぬばかりに衰へたるありさまに、さまぐ\の心を動かしたり。

むかし人こゝろゆくらにものかきし
ふすまにたてばなみだながるゝ

いにしへのくしきゑだくみおほかれど
きみがごときはわがこひやまず

なほざりにゑがきし蘭のふでにみる
たゝみのあとのなつかしきかな

いにしへの人にわれあれやもろともに
ものいはましをものかゝましを

木の葉村にて

肥後の國木の葉村に木の葉神社あり、社頭に木の葉猿といふものを賣る。われ旅中、この猿を作る家、賣る店のさまを見んとて半日を此村にすごしたることあり。この猿、土にてつくり胡粉と丹と青とを極めて大膽なる手法にて塗りつけ、素樸にして剛快なる趣味を以て地方土俗玩具中に雄視するものなり。

このごろのよるのながきにはにねりて
むらのおきながつくらせるさるさる

木の葉猿　　淡島寒月氏

かはら焼くおきながみせのさむしろの
かぜにふかるゝさにぬりのさる

乾し並めてかずもしらえぬさにぬりの
ましらがかほはみるにさやけし

こゝろなきおいがいろどるはにざるの
まなこいかりて世のひとをみる

さるの皇子茶みせのたなにうま並めて
あしたのかりにいまたゝすらし

肥後の海邊にて

たちならぶ墓のかなたのうなばらを
ほぶねゆきかふひごのはまむら

村荘雑事

菊うゝとおりたつにはのこのまゆも
たまたまとほきうぐひすのこゑ

きくうゝとつちにまみれてさにはべに
われたちくらす人なとひそね

はなすぎてのびつくしたるすゐせんの
ほそ葉みだれてあめそゝぐみゆ

かすみ立つをちかたのべのわかくさの
しら根しぬぎてしみづわくらし

しらゆりの葉わけのつぼみいちじろく
みゆべくなりぬあさにひにけに

野のとりのにはのをさゝにかよひきて
あさるあのとのかそけくもあるか

ゆくはるのかぜをときじみかしのねの
つちにみだれてちるわかばかな

まめうゝるはたのくろつちこのごろの
あめをふくみてあをまちにけむ

いりひさすはたけのくろに豆うゝと
つちおしならす手のひらのおと

あめはれしきりのしたはにぬれそぼつ
あしたのかどのつきみさうかな

うまのるとわがたちいづるあかときの
つゆにぬれたるからたちのかき

あきづけばまたさきいでしうらにはの
くさにこぼるゝやまぶきのはな

水かれしはちすのはちにつゆくさの
はなさきいでぬあきはきぬらし

おこたりて草になりゆくひろにはの
いりひまだらにむしのねぞする

しげりたつかしのこのまのあを空を
ながるゝくものやむときもなし

わがかどのあれたるはたをゑがゝむと
ふたりのゑかきくさに立つみゆ

むさしのゝくさにとばしるむらさめの
いやしく〳〵にくるゝあきかな

印象

會津兄

眞夏の日光が直射する舊都の西の京を、五六の人々と共に白土の路の上を、ついぢ垣の崩れた間を、翠松の奥にたゝなはる伽藍の靜けさ、蒼空に向ふ塔の頂の崇さを胸にたゝんで歸つて來て間もなく、大兄の詩情に浮び出され、映出せられたる同じ舊都の姿に接するを

得たるは何といふ悦でせう。私はこゝに二重の印象を比較して見る機會を得たのでした。

大兄が專念究めらるゝ奈良の美術は、遠からず一つのまとまつた形を備へて、萬人の前に、具體的な巨な時代の影像となつて現はるゝ事と心のときめきをもつて待つてゐます。今、大兄の詠じ出された奈良は、端的に素直に、詩人の靈感によつて、この巨な影像の幻影を空中に描いて見せます。私はこれによつて、全的の奈良の空氣に、全的の奈良の姿に、まざまざと接せずには居られません。

大兄の豐かな、まろらかな、溢るゝ力はあれど、それを押へて適當な制限を附し隅々まで行きわたれども、それを鋭角を以て現はさず、尖端をたわめて滿を持する靜けさの藝術は、大きな抱擁力を示すと同時に、全的のものゝ姿を浮び出させずには置きません。

大兄の詠じ出されたる奈良は廢都ではない。廢都そのもゝの姿ではない。廢都の中に散在する斷片を通じてその全體を浮び出さしめる。そのかみの大氣の中にこそ吾々は生き、そのかみの奈良の力にこそ我我は接する。卽ち詩人の呼吸によつて、我々は咲く花

の匂ふが如き奈良に面するのである。即ち生きた奈良をこそ感ずるのです。廢都の姿とは即ち奈良の斷片といふことです。大兄の詩情によつて初めて再建せられたる奈良の力に接する限りなき悦び、永く生きる藝術の生命を感ずる深い感謝を私は表はさずにはゐられません。

恐らく——私の想像をおゆるし下さい——大兄の奈良美術の御研究は、科學者の持つ理智の統一的な精確な實證法と、詩人が持つ創造的なイマジネエションとの並立せられたものであらうと思はれます。そして、この歌集はその多年の勞作の先驅をなすものであり、その輪廓を示すものであり、情理あはせた全的表出の閃きであると思はれます。

多年鏤刻せられたる具體的研究の巨大な彫像の浮び上るのをまつ心に、まづもつてこの尊き詩的閃光を與へられたるを感謝しつゝ、感想とも印象表現ともつかぬこの短文を終ることをおゆるし下さい。

九月十九日

病氣と疲勞とた鬪ひつゝ外房州の海岸にて

吉江喬松

讀後感

昔を語れ沈默の石よ、高き殿堂よいざ言問はん
言の葉なきか都大路よ、鎭めの神よ蒼茫の感い
かに。
聖なる城壁の裡、物みな靈ある如かれど、
あゝ久遠の羅馬よ、我にのみ默するぞうたてき。

これは私が多年愛誦するゲーテの「羅馬悲歌」第一歌

の劈頭であります。私は秋草道人の「南京新唱」を讀んで「羅馬悲歌」を思出し「羅馬悲歌」を讀んで益々「南京新唱」を面白く感じました。敢て作品としての「羅馬悲歌」と「南京新唱」とを比較評論する積りではありません。ましてゲーテと秋草道人とを比較する程の阿房な料簡を持つては居りません。そんなことをしたら世人の嘲笑は兎に角、私は秋草道人の一喝が怖しいのです。尤もゲーテは一喝を食はせるやうなことはしないかも知れません。「南京新唱」をゲーテに讀ませても色氣が足りないなあ位のことを云つて微笑するだらうと

思ひます。兎にも角にも事實私の聯想が「羅馬悲歌」に飛んだのだから仕方がありません。聯想がそんな飛躍をするのは怪しからんと云はれるなら、へえと云つて引込むだけですが聯想に論理的訓練を與へたことの無い者ですから、どうも止むを得ないのです。つまりへんな癖と云ふべきものでせうか。實際へんです。私はガソリンの匂をかぐと伯林市街を聯想するのです。いやベルグソン流に云へばガソリンの匂の中に伯林市街をかぐのです。「南京新唱」の中に「羅馬悲歌」を味ふのも例の癖と見て下さい。

近づきて仰ぎみれども御佛のみそなはすとも
あらぬ淋しさ。

天地にわれひとりゐて立つ如きこの淋しさを
君はほゝゑむ。

かう云ふ淋しさは「羅馬悲歌」には少しも歌はれてはありません。「羅馬悲歌」は古典藝術の禮讃と戀愛の陶醉とを二大樞軸として居るからであります。いや、秤にかけたらむしろ Erotik の方が遙に重いだらうと思ひます。それなら「羅馬悲歌」から Erotik の分子を取り除いたら如何んなものが出來るだらうかと云ふに、これ

はどうも取り除くわけには行きかねるのです。と云ふのはゲーテの古典藝術の禮讃は Erotik を通じて、もつと適切に云へば Erotik に擔はれてゐるからであります。

美しき昔、さながらの夢なれど、唯一つの宮居ぞ
さなりアモルの宮居ぞ、とはに殘りて戀の我身
を守りゆく。
げに羅馬よ、なれこそは大千世界なれ。されど
戀なくば、
世界は世界にあらじ、羅馬も羅馬にあらじとぞ

思ふ。（第一歌）

と歌つたり、或はまた

昔の香袖打つ此地に來ぬれば、嬉しや我身に靈
ある如し、
遠つ代今の代、有りの事々趣深くも我には語る。
此處にして、いそいそしく世々の藝術品を觀、
日毎に得知らぬ樂覺ゆるは人の勸めぞ。
しかはあれ、アモルこそ夜毎我を忙しき人とな
らしむ、
何の興ぞ、半ば教へらるゝのみにて我は幸ある

者となる。
我とて戀しき人の胸の形を視、細腰かひなに培きぬるものを、
など我自ら我に敎ふることのなからでやは。
かくて我、初めて大理石の形を正しと思ひ、
敏き眼もて觀、憧るゝ手もてふれ、さて之を比ぶるなり。（第五歌）

と歌つてゐるくらゐですから「羅馬悲歌」とエロチクとは不可分離のものに相違ありません。之を分離したら「羅馬悲歌」は悲歌でなくなつて「羅馬遊記」みたやうなものになるでせう。

ところで秋草道人の「南京新唱」には戀愛の陶醉は見られません。藥にしたくも無いものは無いのです。なにもですが之は表面的の觀察であると思ひます。精神分析法に訴へて道人の歌を解剖するにも及びませんが、底流となつて流れるエロチクは看て取ることが出來ます。爆發の際に地表に噴出した火山岩では無いが、地底の深い處から噴出して地表に頭を出さなかつた Plutonic Rock です、冥府の岩です、地質學者の所謂深造岩です。花崗岩もこの一種のさうですが、私は

道人の歌にほのみえてゐるエロチクを花崗岩に比べたいと思ひます。その美しさとその硬さに於て。ただし花崗岩は耐熱の度が低く、火災には可なり脆いと云ふ話を聞きます。道人の歌に含まれたエロチクは若し道人が一異性と熱烈な戀を體驗する日があつたら、如何な風に燃え上るでせう。

なまめきて膝に立てたる白妙の佛のひぢは現ともなし。

御佛のひぢまろらなるやは肌の汗むす迄に茂る山かな。

藤原のおほききさきを現身にあひ見る如くあかき唇。

から風呂のゆげのおぼろにしゝむらを人に吸はせし佛あやしも。

うらみわび立ちあかしたるさを鹿の燃ゆる眼に秋の風吹く。

これらの歌の底流となつてゐる抒情素はたしかにエロチクであると思ひます。露骨とか赤裸々とかを尙ぶ近代趣味から觀たら直接性が足りないかのやうに思はれるかも知れませんが、私はこれらの歌の聲調が

一種の壓力を持つてゐるので讀者に對して說得的の效果を及ぼすから、可なり直接性を助けてゐると思ひます。私は萬葉調の壓力を信ずるものであります。

秋草道人は北國に生れた人です。色彩の乏しいニユアンスの無い北國にです、其道人があをによし奈良に遊んで佛教藝術の硏究や觀照に陶醉したのです。一通りの陶醉ではありません。（その硏究はまとまつて世に出たものはまだ無いが深邃な境地に達してゐるのです。私はこの方面の仕事も何かの形で公にされる日の來らんことを切望してゐます。）北國の獨逸

に生れたゲーテが南歐羅馬に遊んだ感懐は次の一節に明に讀まれます。

あゝ羅馬の樂しさや如何ばかりぞ。思へば
北の國天さかるひな、天津日は灰色なし、
悲める御空は重々しく頭の上に落ちかゝり、
色彩も形相もなき世界は疲れし我身を圍めば
われは「我」を立越え、安からぬ靈の小暗き道をたどらんと、
さびしくも冥想に沈み居たりけむを。
此處羅馬の地、瀨氣の光爽かに我ぬかを照し、

フォエブスの神、もろもろの形相と色彩とを呼
起したまふ。
夕ざれば星さえ渡り、小夜更くるまでやさしき
歌は響き、
月の影さへ北の國の日よりも明かなるぞめで
たき。（第七歌）

道人の歌には次のやうなのがあります。北國にゐては作れさうもない歌です。

たび人のめにいたきまで緑なるついぢのひま
の菜畑の色。

春來ぬといまかもろびと往返り佛の庭に花さ
くらしも。

かすが野に押し照る月のほがらかに秋の夕と
なりにけるかも。

道人は古都の自然の風物を多く詠じたが「羅馬悲歌」には自然はあまり多く歌はれてゐません。道人の自然詩がまた特色のあるものです。元來道人は俳句に於て透得底の人ですから自然に對する敬虔な密察を敢てするのも、俳句に於ける多年の參究から力を得て居るのかも知れません。俳句に於ける客觀描寫その物

だけならば第一義的價値ありとも思はれませんが、飽迄その方向につき進むと或物がにじみ出して來るらしく、其時はもう單なる客觀描寫とも名づけ難いのです。道人の自然詩はこの意味に於て單なる客觀描寫を超越してゐると思ひます。

あまつ風吹きのすさみに二上のをさへ峰さへ
葛城の雲。

嵐吹く古き都の中空の入日の雲に燃ゆる塔かな。

これらの歌には或物が潛んでゐます。突飛な聯想は私をしてゴオホの繪を思はせます。或物とは生命の

ことです。躍動する生命のことです。

道人は昔から萬葉調的な俳諧歌にも特技を有する人ですが「南京新唱」にも次のやうなのがあります。(「放浪唫草」にもあります。)

鬼一つ行者の膝を抜け出でゝ霞うつらむ二上
の里。

足曳の山のはざまの岩角のつらゝに似たる君
があごひげ。

鬼と霞、つららとあごひげ、配合の美に過ぎずと云へばそれまでのことですが、詠ぜられた對象が對象だから

これら配合の材料が此處では一種の必然的關係を髣髴させるから面白いと思ひます。いづれにしても道人の高潔な風格が表現されてゐるのです。十七八年前道人が寄せた短信に「ある日、すゞろに一句を口ずさみて自ら大に感じ一家の風格を思ひ定め侍る。木兎のあかき眼やつゆ時雨」といふのがあります。道人の風格はかういふ本丸を根據としてゐるので、例の萬葉調的な俳諧歌も、この本丸から放射線狀にひかれた一路であるらしく思はれます。この本丸の建設材料には芭蕉もあり蕪村もあり一茶もあり李白も杜甫も中

晩唐諸家もあるのですが、そんな解剖は私の柄に無さそうですから試みません。兎に角いろいろな點から觀て道人のこの歌集には如何しても道人の句集が伴はねばなるまいと思ひます。さうしたら銀椀裡に雪を盛つたやうな趣が一層面白く見られ、道人本來の面目が一段と明かになることでせう。この事業は道人の若い門下生の人々に是非お願したいと思ひます。句集の發表は或は道人が許さないかも知れませんが何も道のためです、大喝を食つても三十棒を喫しても編輯していたゞきたいと思ひます。

「山中高歌」「放浪唫草、」「村莊雜事」は「南京新唱」の Pathetisch なのと違つて所謂遠神を宕出する底の風味が多いかと思はれます。韋蘇州などの感化もあるやうに見受けられる作もあります。別けて「村莊雜事」は絢爛を出で丶平淡に入ると云つたやうな境地を忍ばせます。淡々として水の如し。水の如くではあるが水道の水ではありません。茗を煮るか茯苓を煮る水でありませう。要するに現代歌壇に於けるこの歌集を譬へて云ふなら

おしなべてさぎりこめたる大空になほ立のぼる曉の雲。(山中高歌)

でありませう。

櫻井天壇

我観

横山有策

日本のやうな、よく謂へば整頓した、惡くいへばいやにせゝこましい國には、何もかも平凡に一様化して了つて、旅行をして見ても、驚異すべき發見などに出逢ふことは滅多に無い。人間の間にも、例へば我が秋草堂主人のやうな隱れた研究家、藝術家のあることは、さうした意味から云へば、或は其まゝにして置くことが、却

つてよいのかも知れない。

秋草堂主人を知る者に彼を說く必要は無い。しかし知らざるものには彼の風格の一端でも紹介することはむづかしい。二十幾貫の肉塊に藏する彼の不壞の魂は、その比較的細い曖昧な眼の窓を通して、容易に人の端倪することを許さない。彼は幼少にして俳壇の一方に活躍してすでに白頭翁等の師を以て任じて居た。彼が藝術の眞髓を握り、堅き自信の足場に立つことを得たのは、早く此頃であつたであらう。殊に鄕國を接する信濃の俳諧寺一茶に興味を曳いて、その一

言一行の末までも精査した熱心は、彼の心に深き養ひとなつたであらう。彼は曾て淡島寒月翁の蛙相撲の圖に「痩がへる負けるな一茶是に在り、次に控へし會津八朔」と戯に題したことがある。が、彼は一茶に悉く傾倒して、その靴の紐を解くを以て滿足する男ではなかつた。しかすべく彼は餘りに自己獨創の要求が强かつた。

彼は藝術家のすべてがもつ凝り性の持主である。一事に興趣を覺えると、すべての時、すべての力、すべての錢を之に注いで、ある地點まで進まねば決して止ま

ない。そして時とすると、其處にやゝ好事家らしいむら氣と、政治家らしい覇氣とが加味せられぬでもない。

彼の凝り性は、英文學――就中ロマンチシズム前後の詩宗――を精讀し、ギリシヤ、エジプトの古藝術に親しみ、記紀萬葉を考究し、書道から古文字學、奈良の古美術、遂には佛像形態學の建設に手を染めて居るのである。そして此の「南京新唱」一卷は、彼が多年、雨に風にその無雜作な百姓姿を大和の寺々に出沒せしめて、其間に醸し成した大なる酒壺の餘瀝に過ぎない。

彼に最も强いのは美を見るの正確さである。美に

憧憬するの深さである。美を説明するのたやすさと面白さである。そして、いつでもどこかに先人未發の新味を出す。所謂何事にも一隻眼と一家言とを持つの人は彼である。彼は決して請賣りをしない。腑に落ちないことは言はない。彼の美の表現に至つては水の如く單純清新なものと、火の如く猛烈雄大なものとを併せ有する。彼に於て最もいとはしいのは、ものいぐさ、氣むづかしさ、そして傲岸らしく見えるところである。

彼は多くの點に於て、英文學史上の一異彩たるドクタア・ジョンソンに酷似してゐる。あの巨軀と皮膚の弱さ、あのほんの皮相的にいふ不器用さ、無遠慮さ、あの座談の巧みさ、あの群雄を駕御する逞しさ、あの近視眼記憶力の强さ、讀書の廣汎さ、あの死に對する異常の恐怖が皆それを語る。しかし秋草堂主人に「ザ・ライヴズ・オヴ・ポエッツ」が書けぬだらう如く、かの博士には、彼の脫俗な書風と、この「南京新唱」の眞似が出來ない。

大正十三年八月三十一日

題詞

霞宿雲遊筆研隨。篇々古調自然奇。
賞音吾豈落人後。一卷南都新唱詩。

會津君嘗爲我有恒學舍敎員。夏秋之交。例休業。君飄然獨遊南都。獲歌若干首而歸。以示余。詞雅調古。其從容不迫處。最見君天分之高。余嗟稱不已。居數年。轉任早稻田大學講師。每歲遊南都。更探山陽九州勝

地。有歌必寄示。君賞玩南都佛像壁畫等古美術。研鑽多年。著述成編。歌共緒餘。此卷印行。蓋出於同人之慫慂也。余稱君歌於十餘年前世人未多識之日。題詩之囑。固所不辭。并錄數語。以還之云。大正甲子秋日。於有竹村莊南窓之下。

成堂學人　增村度次拜

南京新唱

大正十三年十二月十二日印刷
大正十三年十二月十五日發行
大正十三年十二月二十五日三版

南京新唱
定價 金壹圓四拾錢

著作者 會津八一
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦
東京市小石川區關口水道町四十六番地
印刷者 茶畑菊太郎
東京市小石川區關口水道町四十六番地
印刷所 有隣印刷株式會社

發行所
東京市日本橋區通 春陽堂
振替東京一六二七番
電話 大手五一番
日本橋五一一番